様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０３４０

研究課題名（和文）情動と技術の人間学的考察（ドイツ文学の場合）

研究課題名（英文）An Anthropological Study of Emotion and Technique (In Case of German Literature)

研究代表者
大宮　勘一郎（OMIYA, KANICHIRO）

東京大学・人文社会系研究科・教授

研究者番号：４０２３３２６７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究においては、情動の歴史的変容過程を、ドイツ文学を事例として考察した。とりわけ、メディア技術が情動の変容にいかなる作用を及ぼしたかに研究の力点を置いた。１８００年前後の「感情」の奔出には書字メディアの役割が、１９００年前後の「気分」のた方向的な逆出には、写真、映画、グラモフォン、タイプライターなどの音声映像技術メディアの役割が大きい。「感情」は個人の内面の形成要因として、「個性」や「主体」を生み出したが、「気分」は個性をむしろ解体する作用として見出された。２０００年前後を画期とするデジタル・メディアの時代においては、情動の非持続性への着目が認められる。

研究成果の概要（英文）：The aim of this research is to describe the historical process of conceptual transformation of emotion with examples of German literature. While the "feeling (Gefuehl)" around 1800, expressed in hand-writings as its media enabled the convergent appearance of "individuality" and "subject", the "mood (Stimmung)" around 1900 can be characterized as anonymous and divergent factor which rather erodes the unity of individual subjectivity, along with the technical media such as gramophone and typewriter that took place of hand-writings. Around 2000, under the dominance of digital media, the momentariness and variableness of the emotion is employed in the political or economical scene, as is also focused in the literary works.

研究分野：ドイツ文学

キーワード：ドイツ文学　思想史

１．研究開始当初の背景
１８００年前後の「感情 Gefühl」への関心の高まり、１９００年前後における「気分 Stimmung」の文学・哲学的主題化と対応するような、デジタル･メディア時代における人間の「情動 Emotion」とその変容に関する議論が、ヨーロッパとりわけドイツの文化研究において深まっている。この動向は、２０－２１世紀のデジタル･メディアへの転換期において起こりつつある変動が、政治的、経済的なマクロ水準におけるものにとどまらず、「情動」という個々の人間を単位とするとミクロな水準にまで及んでいるという観察に基づいていると一般的には考えられるが、それだけではない。むしろ「情動」に個人を超えた集団的広がりが認められようとしているのである。本プロジェクトも、この研究動向の問題意識を共有し、情動とその変容に関する新たな理論への寄与を目指すものである。
また、１８００年前後におけるドイツ文学の国民文学としての前景化と、１９００年前後におけるその地位の問い直しは、各々「感情」、「気分」の両概念の特質と深く結びついている。この両概念の考察は、もとよりドイツ文学研究の重要な一分野をなすものであるが、本プロジェクトは、この両概念をさらに「メディア史 Mediengeschichte」と関連付け、その歴史性に注目することで、従来専ら社会史的に考察されてきたドイツ文学の歴史的変化を、より基礎的な構造に遡って解明することを目指す。

２．研究の目的
本研究プロジェクトの目的は、人間の「情動性 Emotionalität」の歴史的変容と文学・芸術の関係を、ドイツ文学・思想を事例として解明することである。とりわけ、科学的知識の増大や技術の発展による環境の変化が人間の情動性に対して及ぼす影響を１８００年、１９００年、そして２０００年という、ドイツの文化研究・メディア研究が技術・学知および社会制度における３つの画期と見なす時期ごとに考察するが、その際文学・芸術表現を情動の結果として受動的にとらえるのではなく、むしろ情動性の変化を能動的に促し、新たな情動性がまさしくそこで構築される場として読み取ることが必要であると考える。文学・芸術に現れるこうした情動性の変容やその兆しをたどることで、本研究は新たな人間学的知見の獲得に寄与することを目指す。

３．研究の方法
本研究プロジェクトは、理論的構築と対話的議論を結合する形で進めてゆく。一方において申請者は、資料の収集と読み込みを通じて、従来の研究蓄積を再検証しつつ考察を進めてゆく。その際、いわゆる文芸テクストのみならず、周辺諸科学の知見を広く取り入れ、その中で文芸テクストの位置づけを定めてゆく学際性を重視する。具体的には、文化研究、歴史研究、社会学、思想史、科学史などの分野との共同作業である。また、本研究は他方、欧米とりわけドイツ語圏の研究者との議論の機会を積極的に設けてゆく。具体的には、ドイツ・ベルリン自由大学のシュレーゲル文学研究所や、マンハイム大学、ハーゲン大学の研究者との交流に積極的な姿勢をとった。

４．研究成果
１８００年の「感情」奔出に関しては、レッシングの戯曲『エミーリア･ガロッティ』、『ミス・サラ・サンプソン』から、ゲーテの『若きヴェルターの悩み』、『タウリスのイフィゲーニエ』、シラーの『群盗』といった１８世紀後半の作品群の再検討を行い、１９世紀初頭のヘルダーリーンやクライストの諸作品におけるその変容過程を追った。そこには多方向的なものであった「感情」の様態変容、すなわち「感情」の文化的規範化と政治的動員という課題が生じていることが明らかとなった。レッシングにおいて、またとりわけ『ヴェルター』においては、個人の独立と自由という理想の内面的基礎であった「感情」が、その直後の時代においてすでに、身体の規律化と整流可能性という問題と深く結びついていったのであり、これはヴェルター的な「自由」からは離反してゆくプロセスである。こうした点の解明から、ドイツ文学における感情表現の特異点として「白兵戦」的状況に着目し、個別作品を対象に考察を行った。「白兵戦」的関係は、「感情」が規範や政治から逃れる局面として、この時代のドイツ文学において重要な表現主題となっている。また、この「感情」研究の所産として『若きヴェルターの悩み』の新訳を解説とともに上梓した。この翻訳は、１８世紀後半 Ch・M・ヴィーラントが初めて提唱し、ゲーテが１８２０年代から概念化を試みた「世界文学」に関する、昨今の新たな議論に一石を投じる目的でなされたものである。グローバル化する世界において、言語と文化の多様性を失うことなく、しかも人類共有の文化的所産として受け継ぐためには、「翻訳」という営みが非常に重要である。その際、情動的な要素を原作から翻訳にどのように移し入れることができるかは、単に翻訳技術上の問題ではなく、翻訳言語のどの層に定位して訳してゆくべきか、という問題を避けてとおることができない。また、翻訳という営みにおいて、遠く離れた人々の情動を緻密に理解する可能性が初めて開かれるのであり、この点から新たな翻訳論考を構想する手がかりを得た。
１９００年の「気分」に関しては、その非人称的な性格に着目し、第一にホーフマンスタールの散文作品を手がかりに、言語の中に立ち現れる非人称的な、高い強度の情動性に着目しつつ考察した。また第二に、無意志的な

記憶と回想がそこから立ち上るプロセスを活写したプルーストの『失われた時を求めて』と、それを記憶を主題として論じるベンヤミンのプルースト論の関係を考察した。また、これに加え、同じベンヤミンと美術史家アビィ・ヴァールブルクの「情念定型」の理念を比較検討する課題に取り組んだ。この主題についてはまた、２０１３年９月から２０１４年３月まで、ヴァイマルのコミュニケーション・文化哲学国際研究所（IKKM）において上級フェローとして繰り返しワークショップやシンポジウムに参加し、２度の講演を行い、国際的知名度の高い優秀なな研究者たちとの間で意見交換と議論を行い、知見を深めた。
さらに、２０００年前後のデジタル・メディア時代の情動のありかたに関して、非固定性・非持続性と遊戯性という観点から、ベンヤミンとエルンスト・ユンガーの「集合」概念と「構成」概念の比較を行った。両者ともに１９３０年代の議論でありながら、現代のメディア的状況にも当てはまる洞察たり得ているものであり、とりわけベンヤミンにおける「集合」と「遊戯」の概念の再検討は、一見無政府的な情動の発露とみえる現在のメディア状況を正しく見通すために有益なものである。この関連においてさらに、現代における「正義」概念の再検討という課題にも取り組み、配分的正義と交換的正義の緊張関係の歴史的推移をドイツ文学とドイツ思想史にたどり、同時に両者とは別の正義理念の伏流を跡づける作業を行った。近代以降の新たな正義理念が、人間の多様な情動性に配慮する仕方で構想されつつあるが、これにも深く関与するこの研究の成果は日本独文学会シンポジウムでの口頭発表を経て、論文として上梓された。なお、この研究に際して、２０１５年７月２５日より８月２３日までドイツ・ベルリン自由大学シュレーゲル文学研究所客員教授として、資料収集、意見交換につとめ、研究を深化させることができた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　９　件）
① 大宮勘一郎、「語らいながら徐々に思考が出来上がる」、“過去の未来”と“未来の過去”－保坂一夫先生古稀記念論文集、査読無、2013、148-170
② 大宮 勘一郎、人間の言語から物の言語へ、藝文研究、査読有、105-2、2013、240-253
③ 大宮 勘一郎、プルーストからベンヤミンへ ― そしてその先 ― 、思想、査読無、1075、2013、140-154
④ 大宮勘一郎、「クライスト 2001/2011」、『研究年報』、30、査読有、2013、99-113
⑤ Kanichiro Omiya 、「Von der Ana-morphoskopie zur Paramorphoskopie „Übersetzen“ nach Benjamin 」、Simultaneität — Übersetzen (Stauffenberg Kolloquium 70)、2014、査読有、73-83
⑥ 大宮勘一郎、「ポール・オースターの系譜学 - 中期作品について -」、れにくさ、Vol. 5-2、査読無、2014、1-8
⑦ 大宮勘一郎、「労働への動員か遊戯への接続か エルンスト・ユンガーの「有機的構成」とベンヤミンの「集合体」について」、新しい人間の設計図、査読無、2015、282-315
⑧ 大宮勘一郎、「白兵戦の倫理」、研究年報、査読有、2015、35-66
⑨ 大宮勘一郎、「配分か交換か － 近代以降の正義と文学 －」、ドイツ文学、査読有、2016、132-148

〔学会発表〕（計　４　件）
① OMIYA, Kanichiro 、Illness and Memory — The Case of Aby Warburg, IKKM（ドイツ、ヴァイマル市）、2013 年 12 月 14 日
② OMIYA, Kanichiro 、The so-called Japanese Romanticism in 1930s 、IKKM（ドイツ、ヴァイマル市）、2014 年 1 月 24 日
③ 大宮勘一郎、配分か交換か － 近代以降の正義と文学 －、日本独文学会秋季研究発表会シンポジウム「もっと正義を」、京都府立大学（京都府京都市）、2014 年 10 月 12 日
④ 大宮勘一郎、イフィゲーニエとペンテジレーア、ゲーテ自然科学の集い例会、慶應義塾大学（東京都港区）、2015 年 10 月 17 日

〔図書〕（計　０　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　０　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　０　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
大宮 勘一郎（OMIYA, Kanichiro）
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：４０２３３２６７

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：